

# 03 明暦の大火

明暦3(1657)年「明暦の大火」と呼ばれる火災が発生し、江戸に甚大な被害をもたらしました。度重なる火災への対策と、寛永期までの都市化の拡大傾向に対応するため、幕府は江戸の都市改造計画を行いました。

まず、江戸城の防火対策として、御三家屋敷を城外移転(城内の尾張・紀伊の屋敷を麴町、水戸の屋敷を小石川に移転)させ、江戸城内に火除地(延焼防止のための空地)が設けられました。さらに、江戸城の外郭内にあった寺社地を外堀の外側に分散配置させるため郭外に移転させました。

また、市中に関しても、江戸城北部・西北部を中心に火除地を設置するとともに、上野広小路(下谷広小路)や中

橋広小路(八重洲通り)も新設されました。加えて、町人地の町割り(町中の道路幅などに関する計画)も策定され、メインストリートである日本橋通りは6丈(18.18m)、本町通りは4.55丈(13.79m)とされました。武家屋敷、寺社地、町人地の移動に伴い、その周辺部に新たな市街地が造成され、赤坂の溜池の一部埋立て、築地の開発、両国橋の設置が行われました。隅田川の東側にも市街地が広がるなど、防火対策を機に江戸の都市空間は大きく変化しました。こうした都市改造により江戸全体のおおまかな骨格が完成し、以降、町割りや都市構造が継承されながら発展していきます。



**明暦の大火** 「江戸火事図巻」江戸東京博物館蔵  
明暦の大火では、明暦3(1657)年1月18日から19日にかけて、激しい乾(西北)の風が吹き、本郷から焼け拡がり、小石川、麴町、佃島・石川島まで延焼しました。一方、駿河台から浅草方面へ向かった火は隅田川を越えて燃え広がり、20日の朝に完全に鎮火するまで、江戸の市街全体を飲み込みました。江戸城の天守閣までも焼け落ち、死者は10万人を超えたと伝えられています。



**寺社地の移転**  
「東都名所 築地西御堂之図」都立中央図書館特別文庫室蔵  
現在の築地本願寺はもともと、西本願寺の別院として浅草御門南の横山町(現在の日本橋横山町、東日本橋)に立地していましたが、明暦の大火により本堂が消失しました。その後、現在の位置に再建されました。



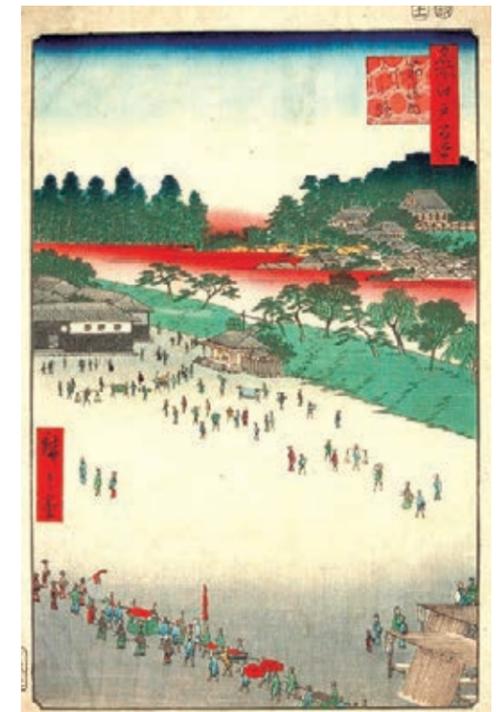
**火除地の設置**  
明暦の大火後には、江戸の各地に火除地が設けられました。  
出典:千葉正樹「『御府内沿革図書』に見る江戸火除地の空間動態」に基づき作成。



**上野広小路(左)** 「上野仁王門之図」国立国会図書館蔵  
江戸時代の大きな寺社地や広小路では、見世物小屋が立ち並び、盛り場としてにぎわいました。



**両国橋** 「両国橋夕涼全図」国立国会図書館蔵  
橋の建設に伴い、隅田川の東側にも市街地が拡大しました。また、橋のたもとには防火のための広小路が設けられました。



**名所江戸百景 筋違内八ツ小路**(すじかいうちやつこうじ) 都立中央図書館特別文庫室蔵  
筋違御門の前の火除地。江戸城外郭に設けられた城門の付近には、警備のため門衛が置かれていました。